

長田夏樹氏の契丹語ノートなど  
—『慶陵』に関わる諸資料の音価対照—

吉池孝一

1. 序言

ここに故長田夏樹先生の大学ノート一冊がある<sup>1</sup>。表紙には“契丹語ノート V大金皇帝經略郎君行記 IV興宗仁懿皇后哀冊”とあり、中には契丹小字とその漢語訳と小字の音価が記されている。さらにノートの初頭と末尾には、書き込みのあるメモ用紙や図表など、大小さまざまな紙片が挟み込まれている。それらのうち、『KOTONOHA』103号において「契丹原字出度表」を<sup>2</sup>、『KOTONOHA』105号において「契丹原字音価表」を<sup>3</sup>、『KOTONOHA』110号において「接尾語表備忘録」を紹介した<sup>4</sup>。いずれも『慶陵』(田村實造・小林行雄著。1953年3月刊行)に付された2枚の表「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)(2)」(以下「接尾語表」と呼ぶ)に関わる資料とみられる。今回は『慶陵』所収「接尾語表」の契丹小字の音価と、「契丹原字出度表」「契丹原字音価表」「接尾語表備忘録」に記された音価、および「契丹語解読方法論序説」(1984年)の音価を対照しつつ、資料成立時期の先後について考えてみた。

2. 音価対照

『慶陵』所収の「接尾語表」(1953年)は49種の接尾語を挙げて音価を付す。いま音価が付された契丹小字のいわゆる原字24種を列挙し、それと「契丹原字出度表」「契丹原字音価表」「接尾語表備忘録」を対照し、参考のため「契丹語解読方法論序説」(序説1984)及びその改定版2001を付す。

<sup>1</sup> 平成23年1月末、故長田夏樹先生の契丹語と女真語の研究に係わるノートやカードなどを長田家よりお寄せいただいた。長田夏樹氏はこの方面における研究の先駆者の一人であり、ノート類は契丹文字と女真文字の解読の経緯を明らかにするうえで得がたいものとなるはずである。まずもって遺品の使用をお許しくださった長田家の皆様へ感謝もうしあげる。これらについては斯界共通の資料とすべく順次紹介をさせていただく。

<sup>2</sup> 吉池2011b参照。「契丹原字出度表」は、61種の契丹原字につき、道宗哀冊と宣懿皇后哀冊における詞頭・詞中・詞尾・単独の出度数と出現比率を記した表である。なお61種の契丹原字中、鉛筆で音価が記されたものが33種ある。

<sup>3</sup> 吉池2011c参照。「契丹原字音価表」は、契丹原字と音価の対応表。出度数によって5色に分けた色鉛筆で原字に丸印を付している。

<sup>4</sup> 吉池2012参照。「接尾語表備忘録」は、「接尾語表」の一部分を、京都大学人文科学研究所人文学会主催「人文科学講座」案内(1953年8月開催)の紙背に手書きしたもの。接尾語の機能を知り得る情報が書き込まれている。

	A 契丹原字 出度表	B 契丹原字 音価表	C 接尾語表 1953	D 接尾語表 備忘録	序説 1984	序説改定版 2001
01. 朮	nu	NU	ni	ni	uen	ni
02. 伏	n	文字無	nu	nu	文字無	ne
03. 𠵹	dur	DUR	du	du <sup>r</sup>	文字有・音価無	文字無
04. 𠵹	de	DE	da	da	de	dy, de
05. 𠵹	sa	SA	ka	a	se	se, ce
06. 𠵹	ud	UD	yi	文字無	de	dur
07. 𠵹	ju	JIU	yan	文字無	文字無	jen
08. 𠵹	su	SU	ca	ca	i	i
09. 𠵹	ni	NI	ń	n	文字無	文字無
10. 𠵹	ten	TEN	tan	tan	文字無	文字無
11. 𠵹	tu	TU	ta	ta	ba	bu
12. 𠵹	𠵹 la	𠵹 LA	𠵹 l	𠵹 ğul	𠵹 𠵹 ge	𠵹 𠵹 ge
13. 𠵹	qu	QU	ga	文字無	ye	je
14. 𠵹	da	DA	da	da	u	u
15. 𠵹	dun	DUN	sun	sun	文字無	文字無
16. 𠵹	ya	QA	la	la	le	le
17. 𠵹	(qa)yu	QU	ku	文字無	gi	gy
18. 𠵹	ba	BA	ba	ba	xu	xu
19. 𠵹	文字有・音価無	文字無	su	su	文字無	an
20. 𠵹	文字有・音価無	文字無	ju	ju	𠵹文字有・音価無	cu, la
21. 𠵹	ya	YA	ga	ga	𠵹	𠵹
22. 𠵹	文字有・音価無	文字無	cu	文字無	文字有・音価無	ç̣i
23. 𠵹	文字無	文字無	sa (C)	文字無	文字無	文字無
24. 𠵹	ru	RU	ğul	l	ga	ga
26. 𠵹	a	A			ši	ši
27. 𠵹	'ad	AD			文字無	文字無
28. 𠵹	文字無	ER			文字無	文字無
29. 𠵹	文字無	BA			文字無	文字無
30. 𠵹	文字有・音価無	BOL			ka	xa

31. 仕	bu	BU	文字無	文字無
32. 朶	či, če	CE	či	cy
33. 化	文字有・音価無	CI	ri	ri
34. 欠	e	E	xe	xy
35. 井	gi	GI	文字有・音価無	文字無
36. 伞	文字無	JI	u	y
37. 竹	文字無	LI	文字無	文字無
38. 平	lu	LU	gul	gul
39. 爻	文字無	LU	文字無	文字無
40. 𠂔	𠂔 mu	MU	𠂔 eu	𠂔土 ew
41. 𠂔	文字無	OL	文字有・音価無	文字有・音価無
42. 𠂔	文字無	QUI	文字無	文字無
43. 𠂔	ri	RI	文字無	by
44. 𠂔	文字無	TA	文字有・音価無	ta
45. 𠂔	文字有・音価無	TA	文字無	文字無
46. 𠂔	tan	TAN	un	un
47. (𠂔の草行体)u		U	文字無	文字無
48. 𠂔	ul	UL	文字無	jis
49. 𠂔	ye	YE	文字無	rud

注：上表の契丹小字の字形につき注記する。

20. 𠂔。「接尾語表」は𠂔と𠂔を区別せず一律に𠂔とする。この点は長田 1951 も同様である。長田 1951 の「契丹元字總表」には𠂔のみ登録し𠂔はなく、書体と出度数を示した表では𠂔を行書とし、楷書は空欄とする。出度数すなわち出現頻度の数は𠂔と𠂔を合計したものとなっている。

40. 𠂔。𠂔' (第三画目横線の最後、左下への折り返し線の長いものがある。これを短い𠂔と区別してコンマを付し𠂔'とする)と𠂔と𠂔は字形を異にしている。その詞頭・詞中・詞尾における分布は次のとおりである。

詞頭	詞中	詞尾
𠂔		
𠂔'		
	𠂔	𠂔

この三種の字形につき、長田 1951 および「契丹原字出度表」は、𠂔を楷書体、𠂔を

行書体とし同一文字として出現頻度数を出し、**ㇿ**’を別字として出す。すなわち、長田 1951 および「契丹原字出度表」は詞頭**ㇿ**’≠詞頭**土**＝詞中**ㇿ**＝詞尾**ㇿ**とする。しかしながら、**土**は詞頭に使用され、**ㇿ**は詞中と詞尾に使用されることからみて、これを書体の相違とするのは困難であろう。この点につき、清格爾泰等 1985 は**ㇿ**につき詞頭にも立つとする。詞頭の**ㇿ**’と詞中詞尾の**ㇿ**はやや字形を異にするがこれを同一字として処理をし、詞頭の**土**とは異なる原字とする。すなわち、詞頭**土**≠詞頭**ㇿ**’＝詞中**ㇿ**＝詞尾**ㇿ**とする。そこで、「接尾語表」はどうかというと、詞頭**土**と詞中詞尾**ㇿ**の両者を語幹に使用しており、別字と見ているようである。即ち詞頭**土**≠詞頭**ㇿ**’≠詞中**ㇿ**＝詞尾**ㇿ**とする。

### 3. 諸資料の関係

『慶陵』（奥付：1953年3月刊行）所収のC「接尾語表」は1953年に公表されたものである。そのほぼ半世紀後の2010年1月12日に長田夏樹氏は長逝された。そして氏の残された資料の中から発見されたものがA「契丹原字出度表」・B「契丹原字音価表」・D「接尾語表備忘録」である。

さて、C「接尾語表」の01. **ㇿ**から24. **ㇿ**までは契丹語の接尾語であり、これは『慶陵』本文に「われわれは『元朝秘史』および甲種本『韃靼館譯語』の各音節頻度表と、興宗・仁懿皇后・道宗・宣懿皇后の四哀冊文にみえる契丹原字の頻度表とを比較対照するとともに、別表にかかげた契丹語接尾語と、中世蒙古語の接尾語を照合して、すでに数十個の契丹原字の音価を推定することができた。」(265頁)とするところの「別表」の「数十個の契丹原字の音価」である。D「接尾語表備忘録」は、C「接尾語表」の一部を、京都大学人文科学研究所人文学会主催「人文科学講座」案内(1953年8月開催)の紙背に手書きしたものであり、接尾語の機能を知り得る情報が書き込まれている。1953年8月開催の案内に書かれているわけであるから特別な事情がないかぎり同年の8月前後に書かれたとするのが自然であろう。そうであるならば『慶陵』(1953年3月刊行)に付されたC「接尾語表」よりもやや後のものということになる<sup>5</sup>。CとDの契丹原字の音価は良

<sup>5</sup> 吉池 2012 では「『慶陵』上巻の刊行年月は奥付によると1953年3月であるから、メモが書かれた時期は、形式的には『慶陵』上巻に挟み込まれた「接尾語表」の後ということになる。しかしながら、次節以降で言及することであるがメモの内容からみるならば「接尾語備忘録」は「接尾語表」の前にある草案のようにみえる。実際の上梓された時期よりも奥付の刊行期日のほうが早いというようなことはいくらかでもあることなので、3月以降に書かれたメモを草案として『慶陵』上巻「接尾語表」が作られたとすることも不可能ではない。あるいはそうではないとしても、「接尾語表」は本体の『慶陵』とは別刷りとなって挟み込まれており、このことは「接尾語表」の完成期日がずれ込んだため、本体とは切り離して後に挟み込んだということを示唆するものであるかもしれない。しかしながら、し

く一致し、ほぼ同時期のものであることがわかるが、一致しない部分もある。この不一致の部分はもしも書き間違えでなかったとしたならば、CからDへの発展であるか、もしくはCの方が小林行雄・山崎忠・長田夏樹三氏共同の見解で、Dが長田氏の個人的な見解と解することができる。

A「契丹原字出度表」とB「契丹原字音価表」はともに京都大学文学部と印刷された原稿用紙に書かれている。A「契丹原字出度表」は、61種の契丹原字につき、道宗哀冊と宣懿皇后哀冊における詞頭・詞中・詞尾・単独の出度数と出現比率を記した表であり、B「契丹原字音価表」は契丹原字と音価の対応表である。後者のBは出度数によって5色に分けた色鉛筆で原字に丸印を付す。この色分けとA「契丹原字出度表」の出度数が一致することからみて、Aに基づいてBが作られたこと明らかである。両者の音価がほぼ一致することからも同時期に作られたことがわかる。なお、興味深い記述が『慶陵』の上巻にある。「現在われわれの推定している原字の音價の詳細は、さらに今後の検討と研究をかさねた上で発表することにしたい。」(265頁)とある。これはC「接尾語表」で公表された音価のほかに、音価の推定を行ったものがあるということであるが、これまで公表されていない。ここに言う「現在われわれの推定している原字」とは、B「契丹原字音価表」の26. ㄨから49. ㄒまでの部分であるかもしれない。そうであるならば、Bは慶陵の研究と契丹文字研究史にとって極めて貴重な資料ということになる。

#### 4. 結語

以上を要するに、A「契丹原字出度表」→B「契丹原字音価表」→C『慶陵』「接尾語表」→D「接尾語表備忘録」の順に作られたということである。

〈参考文献(発行年順)〉

長田夏樹 1951. 「契丹文字解讀の可能性 一村山七郎氏の論文を読みて一」, 『神戸外大論叢』第2巻第4号, 40-66頁。

田村實造・小林行雄 1952-53. 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に關する考古學的調査報告』(上巻本文冊、下巻圖版冊)京都大學文學部 座右寶刊行會。上巻は1953年、下巻は1952年發行。

---

ばらくは『慶陵』の前後に書かれたとして議論を先にすすめることとする。」(2頁)として、「接尾語備忘録」を「接尾語表」の前にある草案とみる考えも示した。このような考え方も不可能ではないが、「接尾語備忘録」を「接尾語表」のやや後と見ても特段の不都合は生じないため、「奥付」の発行年による時期の先後によることにする。

- 小林行雄・山崎忠・長田夏樹 1953. 「接尾語として用いられた契丹文字の類別表(1)(2)」, 『慶陵 東モンゴリアにおける遼代帝王陵とその壁畫に關する考古學的調査報告』(上巻本文冊) 田村實造・小林行雄著, 京都大學文學部 座右寶刊行会。
- 清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985. 『契丹小字研究』北京: 中国社会科学出版社。
- 長田夏樹 2001. 『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文釈・民俗言語学試論・邪馬台国の言語—』京都: ナカニシヤ出版。
- 長田夏樹先生追悼集刊行会(長田礼子 長田俊樹 遠藤光暁 竹越孝 太田斎 橋本貴子)編 2011. 『長田夏樹先生追悼集』東京: 好文出版。
- 長田礼子 2011. 「長田夏樹年譜」, 『長田夏樹先生追悼集』(長田夏樹先生追悼集刊行会編 2011. 好文出版), 343-360 頁。
- 吉池孝一 2011a. 「『慶陵』の契丹文字接尾語表について」, 『KOTONOHA 百号記念論集』(古代文字資料館) 単刊第 5, 90-107 頁。
- 吉池孝一 2011b. 「長田夏樹氏の契丹語ノートなど —契丹原字出度表—」, 『KOTONOHA』(古代文字資料館) 第 103 号, 9-19 頁。
- 吉池孝一 2011c. 「長田夏樹氏の契丹語ノートなど —契丹原字音価表—」, 『KOTONOHA』(古代文字資料館) 第 105 号, 19-26 頁。
- 吉池孝一 2012. 「長田夏樹氏の契丹語ノートなど —接尾語表備忘録—」, 『KOTONOHA』(古代文字資料館) 第 110 号, 1-8 頁。

\*本稿で使用した契丹小字のフォントは、内モンゴル大学の契丹文字再研究課題組と内モンゴル蒙科立軟件有限責任会社が制作したものによった。使用を御許可くださった関係諸氏に感謝申し上げる。